

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)
分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 筑田博隆

所属機関名 東京大学整形外科・脊椎外科准教授

研究要旨 頸椎椎弓形成術後の術後患者満足度の予測因子を 44 名の頸椎後縦靱帯骨化症患者において後ろ向き調査したところ、65.9%の患者が術後満足していた。不満足群には有意に山型骨化パターンが多く、満足群には術後に身体的機能改善を認識している患者が有意に多かった。

A . 研究目的

頸椎後縦靱帯骨化症患者における、頸椎椎弓形成術後の術後患者満足度の予測因子を明らかにすること。

B . 研究方法

後ろ向き調査。2003 年から 2013 年に東大病院で頸椎椎弓形成術を受けた頸椎後縦靱帯骨化症患者 44 名(平均年齢 63.8 歳)を対象にした。質問票を用いて術後患者満足度を評価し、満足群と不満足群の 2 群間での術前画像所見と患者立脚型アウトカムを比較した。

(倫理面での配慮)

当院研究室内でデータ解析を行った。

C . 研究結果

術後満足群は 29 名(65.9%)であった。不満足群では有意に山型の骨化パターンが多かった(46.7% vs 17.2%, $p=0.04$)。満足群では SF-36 PCS の Minimum clinically important distance に達している患者(81.8% vs 14.3%, $p<0.01$)、JOACMEQ 下肢機能において治療効果ありと判定されている患者(61.5% vs

10.0%, $p<0.01$) が有意に多かった。

D . 考察

患者立脚型アウトカムを用いた術後成績評価を行った。本研究の結果は、頸椎椎弓形成術は頸椎後縦靱帯骨化症患者に対する 1 つの手術治療法であるが、骨化パターンによっては治療成績が十分でない可能性があるという過去の報告と一致する。治療法または患者選択についてのさらなる研究が必要である。

E . 結論

山型骨化パターンの頸椎後縦靱帯骨化症患者には頸椎椎弓形成術は不十分である。また、身体的機能、特に下肢機能の改善を認識できた患者は術後満足する。

F . 健康危険情報

総括研究報告書にまとめて記載

G . 研究発表

1. 論文発表
投稿中

2.学会発表

Spine Summit 2016, March 16 to 19,
2016, Orlando, FL, USA

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし